

北投温泉を歩くーその2

片倉 佳史

台湾の首位都市として君臨する台北市。その歴史をたどってみよう。今回は前回に続き、台北郊外の温泉地・北投を取り上げてみたい。台湾最大の温泉郷に残る日本統治時代の歴史建築や遺構などをたどってみよう。

鉄道部の職員によって開かれた寺院

北投の温泉街の奥まった場所に普濟寺と呼ばれる仏教寺院がある。温泉街を見おろせる高台にあり、日本統治時代に発行された旅行案内書などでは、景勝地としてこの寺院の名が挙げられている。

ここは鉄道員と密接な繋がりをもっている。日本統治時代の名称は「鉄真院（てっしんいん）」。

臨濟宗妙心寺派の寺院で、台湾総督府鉄道部の職員によって発議され、開かれたという経緯をもっている。信徒にも鉄道関係者が多かったという。

温泉街を抜け、道路から細い石段を上っていくと、その先に本堂がそびえている。緑の中に落ち着いた雰囲気を持っている。初代の本堂は1915（大正4）年12月に起工し、翌年1月に竣工したという。後に大がかりな改築が行なわれ、1934（昭和9）年に竣工して現在に至る。同年の3月26日には盛大な式典が催されたという。

寺院としては圓山の護国禪寺分院という位置づけとなっていた。堂内を見ると、そこは畳敷きで



普濟寺全景。日本統治時代は鉄真院の名で呼ばれていた。

ある。これは言うまでもなく、日本人が持ち込んだ寺院建築の名残である。畳敷きの空間が残る日本統治時代の寺院建築はここ以外でも見ることはできるが、戦後という時代の長さを考えると、こうしたものが残っているのは奇蹟に近い。保存状態も良好だ。

「鉄道翁」と称された村上彰一の碑

本堂の脇に自然石を用いた石碑が残っている。これは台湾総督府鉄道部の職員だった村上彰一という人物の石碑で、建碑は1934（昭和9）年7月。碑文の上方には「村上鐵道翁略傳碑」の文字が刻まれている。

石碑は高さが121センチ、幅が78センチと大きなものである。茂みの中にあり、碑文は風化が進んでいるためにやや見えにくい部分もある。しかし判読は可能だ。

村上 は日本の鉄道黎明期に活躍した人物で、1878年に開拓使に入庁し、幌内鉄道の運営に関わっている。その後、日本鉄道会社に入社し、若くして上野駅長に就いている。1901（明治34）年には台湾へ渡り、縦貫鉄道の建設に関わったほか、基隆港や打狗（後の高雄）港の水陸連絡設備などの設計を担っている。鉄道部においては運輸課長の地位にも就いたが、弱冠46歳で世を去った。人生の大半が鉄道と関わりのある生涯だった。

なお、この石碑の撰文者は下村宏である。下村は第7代台湾総督の明石元二郎に招かれた人物で、台湾総督府民政長官（後に総務長官と改称）



「鉄道翁」こと村上彰一の略伝を記した石碑。撰文は歌人としても知られた下村宏だった。

を6年にわたって務めている。終戦時は内閣情報局総裁の地位にあり、玉音放送の発案者でもあった。歌人としても評価が高く、「下村海南」の号が知られている。

謎に包まれた「湯守観音」

村上鉄道翁略伝碑のすぐ脇に地藏尊が安置されている。日本でもよく見かける地藏尊で、左手に子供を抱いている。いわゆる子安地藏である。

文献をひも解くと、この場所には「湯守観音」と呼ばれた像があった。寺院が開かれた際に設けられたもので、モデルとなったのは西門町にあった西国三十三番観世音像だったという。確かに、古写真を見ると、写し霊場に置かれる石仏に似た風体となっている。

湯守観音は正式には「大慈大悲北投湯守観音大菩薩」を名乗っていた。しかし、これではあまりにも長いということで、別称が検討された。当初、北投観音、温泉観音、湯谷観音、湯瀧観音など、いくつかの名称案が出されたようである。最終的には村上彰一の意見もあって、湯守観音に落ち着いたが、「ゆもり」では「湯が漏れる」とか、「イモリ」に聞こえてしまうとか、揶揄する声もあったようである。

湯守観音については古写真が残っている。これを見ると、小さいながらも独立した祠が設けられ、像はそこに安置されていた。この祠がどの辺りに



本堂脇に安置されている子安地藏。湯守観音の存在は郷土史研究家の関心を集めている。

あったのかは不明だが、境内の上方にあったという証言は残っている。

文献によれば、北投内地人組合の発起で、北投の温泉街を切りひらいた平田源吾が奔走し、村上彰一が寄贈したものであるという。奉納式は1905（明治38）年9月21日に実施された。

なお、現在、安置されている地藏尊は1930（昭和5）年に据えられたものである。先代の湯守観音については謎が多く、考証が待たれている。北投を舞台に郷土史の探究を続ける楊燁さんの話では、湯守観音は現存しており、普濟寺本堂の奥に隠されているという。ただし、公開されたことはなく、寺院としては取材を一切受け付けていない現実もある。しかし、もし、残されているのなら、日の目を見る瞬間が待ち遠しいかぎりである。

北投に善光寺を訪ねる

普濟寺からさらに進んでいくと、「銀光巷」と呼ばれている道路がある。これはかつて、善光寺の参道であった。曲がりくねった路地は鬱蒼とした緑に覆われている。ここを20分あまり進んでいくと、善光寺が見えてくる。

寺院は高台にあるため、普濟寺以上に眺望が利く。大きな谷間が見おろせ、北投の温泉街が一望できるほか、遠くには「淡水富士」と呼ばれた観音山までもが見わたせる。湯けむりが立ちこめた温泉街の先には淡水河によって形成された広大な

沖積平野が見え、長い参道を歩いてきた人々を癒すのに十分な美しさと謳われた。

寺院は信州の善光寺別院として開かれ、多くの信徒が訪れていた。浄土宗西山深草派に属し、同派が台湾に設けた唯一の寺院でもあった。その由来は1895（明治28）年に遡る。領台当初、新来の統治者である日本への抵抗運動が各地に起こっていた。これを鎮圧するべく、近衛師団が派遣されたが、その際、北白川宮能久親王が新領土である台湾にも善光寺を建てるように指示したという。その後、清国統治時代に小さな炭坑があったというこの場所が寄進され、善光寺台湾別院の開基が決まった。

本堂は戦後に建て直されているが、堂内は畳敷きとなっており、日本統治時代から受け継がれた仏壇が中央に置かれている。戦後も長らく日本人僧侶がいたと言われるが、現在は台湾人のみとなっている。

ここは戦前から多くの日本人物故者の霊を弔ってきた場所で、戦後、日本人居住者が引き揚げた後も中国人に荒らされることなく、現在も祀られている。

寺院の傍らには北投石の発見者・岡本要八郎を記念した石碑が置かれている。岡本要八郎頌徳碑と呼ばれたこの石碑は植え込みに隠れるように置かれており、非常にわかりにくい。しかし、石材



善光寺本堂。本堂は戦後に建て直されているが、内部には畳敷きの空間が確保されている。



堂前からは雄大な眺めが楽しめる。1932（昭和7）に举行された善光寺大法要は盛大なもので、日本本土からも信者がやってきたと伝えられる。

は日本から運び込まれた高価な秩父青石が用いられている。

石碑の裏には「紀元二六〇〇年建」と刻まれている（紀元2600年は西暦1940年）。由来が記された碑文は楷書体でしかもカタカナ書きとなっているのが珍しい。ここを訪れたなら、ぜひとも見ておきたい遺構である。

北投石—台湾の名が付いた地質鉱物

北投を代表する産品として、北投石についても紹介しておきたい。これは日本統治時代に発見された特殊鉱物として知られ、現在もなお、療養の研究において注目を集める存在である。

北投石は硫酸バリウム的一种で、ラジウムなどの放射性元素を含んだ特殊鉱物である。その発見劇は1905（明治38）年10月に岡本要八郎という人物が北投溪の河床に沈殿物を発見したことにあった。

岡本は改めて結晶を採集し、研究を続けた。その結果、翌々年の学術発表を経て、1912（明治45）年に新鉱物と認定され、北投石（ホクトライト・Hokutolite）と命名された。これは台湾の地名が付いた最初の地質鉱物であったことも特筆される。

北投石は通常の数から一万倍と言われるほど放

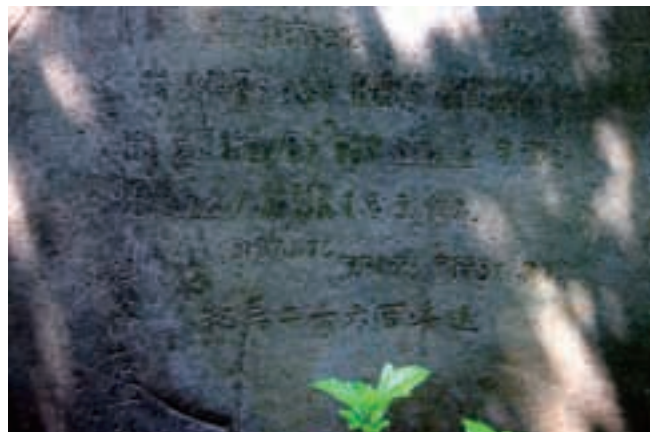
射能が強く、その後、同質とされるものが秋田県の玉川温泉でも確認されることになった。こちらは昭和 29 年に文化財保護法に従い、特別天然記念物に指定されている。

北投石は生成に約一万年を要すると言われており、希少価値がうかがい知れる。戦後の研究では北投石は独立鉱物とは扱われず、現在は名称も含鉛重晶石とされているが、北投石の名は広く定着しており、北投温泉を知らなくても北投石は知っているという人もいるほどである。難病を治癒できる奇跡の石としての関心は非常に高い。現在、天然の北投石は北投温泉博物館などで見ることができる。

なお、岡本要八郎は台湾総督府に勤務しており、教育に携わっていた。個人的興味から台湾の鉱物に魅せられ、独自に探究を重ねて北投石の存在に出会い、これを世に知らしめた。北投石の発見から一世紀が過ぎた 2005 年 10 月、陳水扁総統率いる台湾政府は岡本氏の功績を称え、教育文化奨章を授与することを発表した。式典には子息が亡父に代わって招かれ、授受の様子が盛大に報道され



岡本翁頌徳碑。本堂へ向かう石段の脇にあるが、雑草に埋もれていてわかりにくい。



碑の裏にはカタカナで岡本要八郎氏と北投石と由来が記されている。

ていた。

泉源・地熱谷を訪ねる

北投の泉源は地熱谷と呼ばれている。日本統治時代の名称は「地獄谷」で、現在も老年世代はこの言い方を好んで用いる。広大な湯の池があり、遊歩道も設けられている。立ちこめる湯気と硫黄の臭気を全身で感じられる場所である。

ここは面積 900 坪という大きな窪地である。流れ出る湯はそのまま溪流となって、北投公園を貫いている。地獄谷の湯温は 90 度を超え、転落すれば死は免れない。実際に事故が頻繁に起こっていたようである。

日本統治時代に発行された絵はがきや古写真、書籍などを見ていると、北投温泉を代表する景観としてはいくつかの場所が挙げられる。たとえば、先にも挙げた鉄真院からの眺めや、北投公園の様子、公共浴場（現・北投温泉博物館）を絡めた湯けむり情緒などがある。そんな中、泉源にあたるこの地獄谷やここから流れ出る北投溪なども構図として数多く採用されている。

「星の湯」と呼ばれた高級保養所

北投の温泉街は平田源吾によって開かれた天狗庵を端緒とし、北投溪の南側に温泉宿が並んでい



温泉路から見おろした地熱谷の様子。日本統治時代は「地獄谷」と呼ばれていた。温泉卵作りが人気だったが、現在は禁止されている。

た。当時は地獄谷の辺りまで開発が進んだが、新北投駅が開設され、利便性が増すと、地獄谷の上方に広がる高台にも保養所や療養施設が並ぶようになった。

地熱谷の上方を伸びる温泉路を歩いていると、美しい日本家屋が目に入ってくる。ここは終戦まで「星の湯」を名乗っていた旅館である。戦前に建てられた保養所らしい優雅な雰囲気に包まれた建物である。

残念ながら、現在、この旅館は営業を休止しており、館内に入ることはできない。戦後は逸邨大飯店を名乗っていたこの旅館だが、小さいながらも独特な雰囲気をまとうっており、日本統治時代の遺構を代表する存在だった。私もガイドブックを執筆する際には必ず掲載物件として取り上げてきた。

この付近は「上北投」と呼ばれ、別荘街となっていたエリアである。遊清にも保養にも適した場所として人気を博していた。ここはその中に建てられた最初の温泉旅館だった。自慢の大浴場は石造りで、重厚感を感じさせる空間だった。泉源から直接湯を引いているので、湯量も豊富だった。

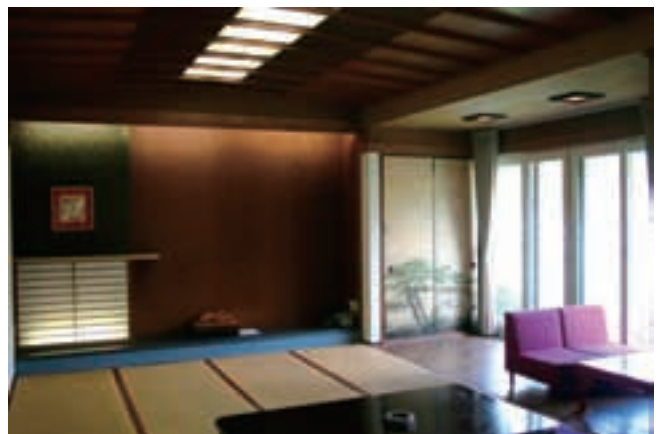
館内は清潔に保たれていた。隅々まで手入れが行き届いており、和洋折衷の建築美が優雅さを支えていた。この時代の療養所、保養所の多くは和洋折衷の造りとなっており、ここもまた、大きな



切り出された自然石を組んで造られた大浴場は圧巻なかぎり。湯量も豊富だった。2008年撮影。



残念ながら営業休止中の「星の湯」。老年世代の間では日本統治時代の呼称が用いられていることが多い。2008年撮影。



館内は清潔に保たれており、これもまた、高級旅館の風情に趣を加えていた。

ロビーと休憩室があった。客室の大半は和室だったが、公共空間となる場所は洋式で、休憩室はゆったりとテーブルやソファが置かれ、天井にはシャンデリアが存在感を示していた。

中庭は和風庭園となっており、亜熱帯性の植物

が深く生い茂っていた。館内のどこにいても自然の恵みを楽しむことができるようにという配慮がなされ、窓を開ければ、日光と共に緑の息吹が吹き込んできた。まさにここだけが切り取られたかのような優雅な空間だった。

経営状況の悪化から看板を下ろして久しいこの旅館だが、営業再開を求める声は少なくない。入口に掲げられた看板も寂しげな表情を見せているように思えてならない。

蒋介石が招いた日本人軍事顧問団の住居

星の湯の付近には陸軍が管理する偕行社があった。しかし、この場所に偕行社があったことは事実だが、その詳細は不明な部分が多く、判明しない部分は少なくない。

戦後、この辺りには蒋介石によって招かれた日本人軍事顧問団「白団」のメンバーが住居としていた家屋があった。現在、星の湯の先にはその家屋が一棟残っている。ここには白団のメンバーの一人である故糸賀公一氏が住んでいた。

糸賀氏は中国名「賀正吉」を名乗り、1951年に台湾へ渡った。その後、1968年に白団の活動が終了するまで、中華民国軍を鍛え上げた。その経緯、実態ともに謎に包まれている白団だが、歴史を看していく上で、その意義は決して小さくはない。

氏は2011年1月29日に99才の生涯を閉じている。私自身は糸賀氏から直接、白団時代の体験



旧糸賀邸の様子。改装はされているものの、その趣きは歴史を感じさせる建物である。



旧糸賀邸の内部。建物は洋風の造りで、ゆとりが保たれている。独自の泉源を持っており、湯量は豊富だ。

を耳にすることは叶わなかったが、氏が18年にわたって暮らしていた場所を前にすると感慨を禁じ得ない。なお、白団については拙著『台湾に生きている日本』（祥伝社）を参照されたい。

吟松閣—古蹟にも指定された和風旅館

吟松閣は星の湯と同様、戦前から続いている温泉旅館である。星の湯からさらに坂道を上っていくので、徒歩でのアクセスは少々きびしいものがある。交通は決して便利とは言えないが、その分、緑があふれており、湯上がり後の散策が楽しめたという。現在もそういった風情は変わっていない。

ここは終戦まで、吟松庵旅館を名乗っていた。看板脇の石段を上っていくと、左手に日本式の石燈籠が置かれている。その奥には木造の旅館がどっしりとした構えを見せている。

建物が竣工したのは1934（昭和9）年のことだったという。基本的には平屋造りだが、奥には2階建ての別棟もある。北投の中では後発の旅館だったが、昭和時代に刊行された旅行案内にはこの宿の名が必ず記されている。

歴史ある温泉旅館の風情は人々の心をとらえて離さないようである。現在は台北市の古蹟に指定され、保存が決まっている。



吟松閣。1937（昭和12）年に編まれた温泉案内には「吟松庵」と記されている。付近一帯は別荘地帯であった。木製の扉を開けると正面玄関がある。錦鯉が泳ぐ池を石橋で渡って玄関へと入っていく。

旧陸軍衛戍療養院北投分院

温泉街から奥まった場所に、知られざる病院建築が残っている。かつての陸軍診療所である。現在の管理者は中華民国軍となっており、国軍北投医院、もしくは818医院と呼ばれている。病院としては、すでに新しい建物に移っており、こちらは長らく放置されている。訪れても廃墟然とした木造家屋が鬱蒼と生い茂った樹木の下にたたずんでいるばかりである。

この建物が設けられたのは1898（明治31）年と古い。当時の名は陸軍衛戍療養院台北分院。日露戦争の傷痍軍人の療養施設として設けられた。当時は北投温泉の黎明期でもあり、その後、終戦まで北投は陸軍関係者との関わりが深い土地となっていた。

戦後は中華民国国民党政府に接収されたが、戦前と同様、軍の管轄下に置かれ、庶民とは無縁の空間だった。この建物では主に精神病患者の療養が行なわれていたという。現在残っているのは玄関を擁した第一棟のみである。亜熱帯ということもあり、風通しが考慮されている。建物は南を向いており、道路からも見えるが、扉は堅く閉ざされている。建物は倒壊の危険があるということで、現時点では内部の見学はできない。今後の動きが気になる物件である。



古蹟になってはいるものの、廃墟としか言いようのない姿である。表通りには面していないので、場所はわかりにくい。

台湾民俗北投文物館

ここは終戦まで佳山旅館と呼ばれていた温泉宿である。創業は1921（大正10）年。現在の建物が竣工したのは1925（大正14）年前後と推定されている。当時、鉄道駅からは最も遠い場所にあった旅館で、温泉街を抜けてから、さらに30分を要したという。しかし、温泉街から離れている分だけ敷地は広く、800坪という広さを誇っていた。

建物は木造2階建てで、旅館建築によく見られた書院造りだった。私が最初にここを訪れた時、玄関や廊下、床の間、そして、畳やふすまに至るまで、ほぼ完全に往時の雰囲気を保たれていた。和風建築ならではの情緒が凝縮された空間で、ひととき印象深い建物であった。

その後、長期にわたる大がかりな修復工事が行なわれた。湧き出る硫黄泉による傷みは想像を超えるもので、さらに白蟻の害も深刻だったという。工事は原型に対して忠実に行なわれたが、それもあって、工期が数年にわたる大工事となっていた。

なお、この建物は1920年代以降、陸軍が士官倶楽部・招待所として使用していた。太平洋戦争が始まり、戦況が悪化していくと、特攻隊として新竹の飛行場から飛び立っていく青年たちが、最後の一晚を過ごす場所にもなっていた。2階にある畳敷きの大広間は、そういった悲しい運命を背



現在は日本家屋の趣を生かし、日本にまつわる文化イベントなどが催されている。



美しい瓦屋根が南国の日差しに照らされている。高台に位置しているためか、真夏でも暑さ知らずだ。



博物館がオープンしたのは1983年のことであった。戦後は国民党政府に接収され、外交部の財産となっていたが、後に払い下げられ、博物館となった。



台湾民俗北投文物館の裏手に位置する木造家屋。北投の町並みが一望の下となっている。



2階には大きな畳敷きの広間が残されている。文化空間として多くの人々に親しまれている。

負った若者たちの人生最後の宴会場だったのである。

少帥禅園—生まれ変わった木造家屋

ここは日本統治時代の旅館建築を再整備し、レ

ストランへと生まれ変わった施設である。建物は新高（にいたか）旅館と呼ばれる宿泊施設だったが、その由来について記された資料はほとんど存在していない。

門は建物を見おろせる高い位置にある。ここから石段を降りていくと、瓦屋根が南国の日差しに照らされている。建物は修復工事を経ており、古さはあまり感じられない。高台にあるためか、夏でも思いのほか涼しく、快適だ。

少帥禅園という名の「少帥」とは、戦後、ここに幽閉されていた張学良にちなんでいる。館内にも張学良に関する展示室が設けられている。

木造家屋の趣を前面に押し出した個性的なインテリアが自慢で、レストランとしてだけでなく、足湯や個室浴場などの設備も整っている。傍らに

はさらに一棟の木造建築があり、こちらも喫茶スペースとなっている。

眺めは素晴らしく、北投の温泉街はもちろん、淡水河を隔てて観音山の山並みまでもが一望できる。できれば時間に余裕をもって訪ねたい場所である。

太鼓が残る廟—天台玉皇宮

北投は温泉だけでなく、寺廟の多いことでも知られていた。特に上北投には大小様々な寺院や廟が並んでいた。

少帥禅園から「杏林巷」と呼ばれる路地を進んでいくと、天台玉皇宮という小さな廟がある。創建は1949年10月とされているが、建物は日本統治時代に建てられたものである。残念ながら、由来を記した文献はなく、創建者はもちろん、戦前の名称すらわからない状態である。

廟は大きなものではない。しかも、屋根をはじめ、全体にわたって改修が施されているため、古色蒼然とした雰囲気は感じられない。しかし、堂内は畳敷きで、廊下などを見ても、明らかに日本式の建築物である。本堂の脇には「奉獻」と刻まれた手水鉢まで残っており、判読は難しいが、奉納された年月日が刻まれている。

さらに、堂内には日本人が残していった長胴太鼓が残っている。表面は渋い輝きを帯びており、寄贈者の名前が記されている。筆書きで、「台北市 福田永太郎 昭和十四年五月吉祥日」とある。銘板も残っており、太鼓や御輿、祭礼具の老舗である「宮本卯之助商店」が製造者であることがわかる。

住職の話では、太鼓の片面は牛革を張ったものだったという。鉦は手打ちで、用材には檜が用いられている。その仕上がりの良さは、素人の目でもはっきりと認識できるものである。



廟の主神は太上老君。祭典日期は旧暦2月15日である。本堂の脇には手水鉢が残っている。これも日本統治時代に置かれたものだが、現在は植木鉢として使用されている。



太鼓の表面には寄贈者の名が記されている。銘板には「東京市浅草区聖天町」と宮本卯之助商店の住所が刻まれている。

北投不動明王祠

天台玉皇宮の先にもう一つ、日本統治時代に建てられた祠が存在する。ここまで来ると、しっとりと清々しい空気が身体を包み込んでくれて爽快だ。

ここは日本統治時代に不動明王寺があった場所である。祠は岩盤をくりぬくようにして設けられている。不動明王は燃えさかる炎を背にして、剣と綱を持っている。その眼光は鋭く、猛々しい怒りの表情が印象的だ。なお、この不動明王像は台北萬華の藤原光蔵という石工の手によって彫られたものである。

この祠は先述した「星の湯」と関係が深い。創



祠は星の湯の主人であった佐野庄太郎が設けた。近くには「草庵創建」と書かれた石碑が残り、「皇紀2601年2月12日」と刻まれている。

設者は時の経営者だった佐野庄太郎。星の湯では湯治に訪れた宿泊客に対し、湯上がり後のリハビリを兼ねて、この祠までの散策を勧めていたという。

古老によれば、日本統治時代、この一帯は祠にちなんで、「不動山」と呼ばれていたそうである。周辺には祠や寺院が並び、宗教銀座の様相を呈していたようだ。以前ほどではないが、現在もいくつかの宗教施設が集まっている。

祠の脇には「お不動の滝」と呼ばれた小さな滝がある。そして、石組みの燈籠や手水舎なども残っている。また、この一帯に数多く棲息していた蛇を神として祀る石碑もある。

もともとは湯治客が散策を兼ねての参拝を目的に建てられた小さな祠。現在は台北市指定の古蹟として、保存が約束されている。

出雲大社から分霊された神社

最後に北投神社について触れておきたい。北投にも神社が設けられていた。北投公園を見おろせ



手水鉢のほか、自然石を組んで設けられた独特な燈籠も残っている。



不動明王祠をお参りするの、療養で北投温泉を訪れた人々にとっての定番コースだったという。

る場所にあり、北投溪の北岸、ちょうど公園を挟んで温泉街に対峙する位置に鎮座していた。

この神社は出雲大社から分霊したもので、北投を訪れた多くの人々が足を運んでいたという。祭神には大国主神を祀り、毎年5月14日を例祭日としていた。1930(昭和5)年5月20日に鎮座を果たしている。

神社の神苑は現在、逸仙国民小学という学校の敷地となっており、拝殿や本殿などは痕跡を残していない。鳥居なども撤去されており、石段は凱達格蘭(ケタガラン)文化館という郷土資料館の脇にあったが、ビル建設工事によって跡形もなくなってしまった。

しかし、1998年、私が神社の遺構を探し訪ねた

際、逸仙国民小学の構内に置かれた一対の狛犬に出会うことができた。その際に居合わせた教員の話では、神社の施設が国民党政府の指示で撤去の憂き目に遭った際、職員たちがこの狛犬を運び出し、草陰に隠し置いたのだという。その後長らく、狛犬は息を潜めるように置かれていたが、自由な時代を迎え、現在は校門の脇に据え置かれている。

私は何度かこの場所を訪れ、そのたびにこの狛犬をカメラに収めてきたが、そのたびに愛くるしい表情が印象に残る。「激変」という言葉で表現される台湾史の中で、安住の地を得た狛犬は、何かを語りかけているようである。



北投神社の狛犬。現在は学校の歴史を物語る遺構として保存されているという。